せいりょう園

［発行］日の出医療福祉グループ　社会福祉法人はりま福祉会　特別養護老人ホームせいりょう園
〒675-0016　兵庫県加古川市野口町長砂 95-20　TEL 079-421-7156　FAX 079-421-6422
令和４年４月　第２５４号　　年間購読料１,０００円（１部１００円）
ﾒｰﾙ seiryoen@bb.banban.jp　　ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞ http://www.seiryoen.or.jp

埼玉：訪問診療医射殺事件

令和４年１月２７日埼玉県ふじみ野市で６６才の男が、死後３０時間が経つ母親（９２才)の「心肺蘇生」を依頼し、断った訪問診療医を射殺しました。

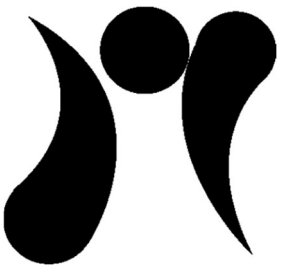
野生動物は『群』の中で子を生み育て、老いて死に逝く時は『群を離れ』、「子を生み育てる」のも「老いて死ぬ」のも『遺伝子』に沿って行います。其れに対して人は、集団の中で『子を生み育てる』と共に『老いて死に逝く身を仲間に委ね』、仲間が『介護して看取り』ます。其処で人は『想い』を巡らせ、『群』を『社会』に創り替え、『思想や宗教』を生み、『人間性や社会性』を育み、『文化・文明』を築いて、『人が入れ代りながら』社会を引き継いで来ました。

『子を生み育てる営み』と『老いて死に逝く身を巡る営み』の間に、人ゆえの『表裏一体の関係性』を生み、『本能や習性』が人ゆえに繋がり、『遺伝子情報』を超えて社会を『変化』させながら、次世代に引き継いで来たのです。

『生殖機能』を失った後は長く生きない『猿』と違い『人』は、『其の後』も長く生きて『死に逝く身』を子や仲間に委ねます。委ねられた子供等は『人ゆえに繋がる本能と習性』を発揮し、介護して看取り『死後にも続く関係性』の中で『死者とも対話』して、社会を変化・発展させながら引き継ぎます。『人と社会』にとって『死を巡る営み』は、『極めて大切』なのです。

しかし今は『予防重視型介護保険』の下で『命と健康』を重視して、老いや死を受容れたくない人が多数となり、『親の死』に際して『人ゆえの本能と習性』が繋がらず、『次世代への引継ぎ』が滞り、『少子化』が顕著になっています。

射殺事件の犯人は『母の死』を受容れず、『生きていてもいい事が無い』と『自殺の道連れ』を求めて射殺しました。近隣の訪問診療医等と『トラブル』を繰り返し、此の数年は射殺された医師が営む訪問診療と訪問介護・看護のみが対応していた様であり、『射殺の背景』には犯人の個人的な『特異性』と同時に、介護保険制度が強調する『予防重視』と『家族の意向重視』の『弊害』が、顕著に『表面化した事件』にも思えます。



（次ページに続く）

（前ページの続き）

『老いて死に逝く身』を他者に委ねるには『覚悟』を伴います。その覚悟に気付いて子供等は『勇気』で応え、『新たな命』を産み、『育てる歓び』に出逢い、『社会』を引き継いで来ました。その『引継ぎ』が途絶え掛けている背景に、『委ねられた人達』の『親の死を受容れたくない願望』を強く感じます。そしてこの度の事件を起こした『母の死を受容れぬ犯人』が抱え込む『深くて暗い心の闇』が、今以上に世間に拡がらぬ事を、切に願います。

『老いの覚悟と産む勇気』は、『楢山節考』も描く『人ゆえに繋がり合う本能の営み』であり、『老衰の身』は本能的に『死を覚悟』して行きます。

『介護現場』であればこそ『死の営み』を大切に。『本当に大切に‼』。

せいりょう園　渋　谷　　哲

急変時の意向

ユニット型特養主任　介護支援専門員　別府　克彦
（社会福祉士・介護福祉士）

Ｋさんは８３歳、男性のご利用者です。脳梗塞の後遺症で言葉が出にくく、思った事と出てくる言葉が違う事はありましたが、目立った認知症状はなく、車椅子での生活でしたが、生活のほとんどは自立されていました。プロ野球がある時期は、毎日のように結果を教えてくれました。午前と午後の決まった時刻に、日課のように園の敷地内を散歩されていた事も印象的でした。

今年の１月２日に脳梗塞を発症し入院。その後ご家族が治療を選択された事で退所となりました。脳梗塞を発症する少し前から、食事を残す事が増えたり、夜間に居室の室温調整をしてほしいという訴えが増えたり、トイレの訴えが増えたりしていました。時刻にこだわりのある方で、トイレに関しては毎日決まった時刻に行かれていましたが、それが曖昧になってきていた様子で、職員は敏感に感じていました。ご本人からも「ご飯も食べれんなりよる。身体がつかえんなってきようるんかな？それでも毎日なんとかしよるけどな・・」と弱気な発言がありました。

１月２日、昼食前になってもホールに出てこられなかったので訪室しました。眠られているように見えたのですが、左足はぴくぴくと動き、声掛けにも反応がありませんでした。看護師からは脳梗塞の可能性があると話がありました。すぐにご家族に連絡し、救急搬送の確認を行いましたが、「まずは面会に行き、父の様子を確認してから判断します」という返事でした。しかし主治医からは「脳梗塞ならばすぐに病院に行った方がいい」と話がありました。私はご家族に連絡するか迷いました。事前に確認していたご家族の意向としては「状態変化時の救急搬送は望まない。園で行える範囲で緩和ケアを行ってほしい」と伺っていたからです。主治医の話を伝えると救急搬送を選択するだろうと思いました。迷いましたが、主治医の話を伝えました。ご家族はすぐに救急搬送を選択されました。

その後は意識が戻ることがありませんでした。奥さんは「意識がなくても最後はせいりょう園に戻りたい」と言われていましたが、息子さんは「出来る治療があるので、何もしないと後悔する」と言われ、中心静脈栄養や胃瘻といった治療を選択されました。事前に急変時の意向を確認していても、その場面になると迷う事はよくあります。どちらの選択が正解という事もありません。しかし、治療を選択したという事を知った職員が「K さんの意向は確認していなかったの？」と私に言いました。その一言が胸に響きました。今までも何人もの延命等の意向を確認していたのですが、Ｋさんに関しては確認していませんでした。特養に入所されている方はどの方も急変する可能性があり、それはよく理解していたつもりだったのですが・・・

少し話は変わるのですが、私は普段、ケアマネジャーとしてケアプランを作成しています。ケアプランというのは、介護サービス計画の事で、この計画を基に介護を行います。１月の中旬はＭさんのケアプランを作成する事になっていたので、１時間程ご本人から話を伺いました。Ｍさんは９３歳の女性のご利用者で、普段から何事にもはっきりとご自身の意見を言われる方です。食事の話、困っている事、糖尿病について等の話を伺っていました。私の頭にはＫさんの件が残っていたので、「年齢的にも大きい病気をする可能性が高いですよね。もし手術が必要だったり、救急車を呼ばないといけない状況になったりしたらどうのようにさせて頂いたらいいですか。ご希望はありますか」と確認を行いました。すると「息子に任すわ。けど『無理に生きて』言うてほしない。あかん言うのを無理やりな。病気と寿命は違うからな」とはっきりと言われました。はっきりとご自身の最期について話して頂いたので、私はただ「分かった！！」と思いました。

２月５日Ｍさんは血圧が２００台と高く、症状から脳梗塞と診断がありました。会話はできても呂律が回っていない状態で、すぐにご家族に来て頂き、状態の説明と救急搬送について確認をしました。ご本人の意向をお伝えする前に、息子さんからは「以前も状態が悪くて入院したが、どんどん悪くなっていった。せいりょう園に入所してから元気になったので、このまま様子をみてほしい」と話がありました。その後私から、今後も脳梗塞を起こす可能性がある事や、急変する可能性がある事、１月に伺ったご本人の意向をお伝えし、今後のご家族の意向を確認しました。息子さんからは「ここでお願いします」、お嫁さんは「本人が言ったんですか」とご本人の意向に驚かれながらも「昔から何でもきっちりしていたんです。この通りにします。私やったらここまではっきり言えるかな・・・」と言われていました。

ご本人とご家族の意向を受け、せいりょう園で丁寧な介護をしていきたい。と思っていたのですが、半月後には以前同様に回復され「血圧が高かったらしいな、もう元気なったで。息子来たんけ？覚えてないわ」と笑われていました。本日もお元気に過ごされています。

Ｋさんは、この文章を作成している途中、３月１日にお亡くなりになったと連絡がありました。

今後も急変時の意向や、終末期に対する思いをご本人から伺っていきたいと考えています。入所されている方の中には、はっきりとした言葉でご自身の思いを表す事が難しい方もいらっしゃいますが、その方の何気ない一言や、表情からその方の覚悟を感じ取り、看取りに繋げていきたいです。

Ｎさんの看取りで感じたこと

ヘルパーステーション介護職　高瀬　美咲
（介護福祉士）

Ｎ さんは平成３０年にケアハウスに入所されました。新聞を毎日音読し、ご自身のペースで過ごされていたそうです。

徐々に洗濯や掃除が困難になり、令和３年の８月にご家族の希望で３日間ヘルパーが訪問しましたがご本人の拒否がみられました。

両足が浮腫(むく)んでおり腰椎圧迫骨折で腰の痛みがあり自身で動くことが困難の為、９月から定期巡回・随時対応型訪問介護看護の契約を行い関わることになりました。今まで自分のことは何でもされていた方なので、初めはトイレ介助に対しても「大丈夫」「いいです」と言われました。

訪室するとトイレの床に座りこむ姿を発見することもあり、ご本人より「３０分かけてトイレに行った」と話を聞きました。腰の痛みもありますが、なるべくご自分の力で動くようにされています。できることは続けていきたいが無理をすると大変なのでヘルパーで掃除に入り、ご本人の気持ちを汲み取りながらトイレ介助の対応を行いました。私は無理に行わず、時間を変更し声かけを行いＮさんとの関係はコミュニケーションをとる中で徐々に打ち解けたように思います。

ご家族の協力もあり、面会に来られた際は介助をしてくださいました。ご家族の存在はＮさんにとって大きく自分の気持ちを伝え安心感もありトイレに行きやすい環境である様子でした。

食事に関しては苦手な食べ物が多かったようです。好きな食べ物を聞くとお刺身と言われていたのでご家族と職員が共有しているノートに記入し日々の様子を伝え、持ってこられたお寿司やゼリー、オロナミンＣをご本人のペースで食されていました。いつもご家族が来られる時間がわかっていたので文章のやりとりだけではなく、その都度関わった時の様子を伝え、ご家族との会話やＮさんとの会話も大切にしていきました。

徐々に食事を受け付けなくなり嘔気も見られましたが、大好きなオロナミンＣは亡くなる日の日中まで少量ずつ飲用されていました。夜間の見回りで少し呼吸が荒い時もありましたが声かけにも反応が見られました。３時頃に訪室した際は息を引き取っていましたが体は温かく穏やかな表情で最期を迎えられました。

お見送りの際、ケアハウスの入居者の方が大勢集まり交流の深い方は涙を流しておられました。ある方よりＮさんとは、ピアノ教室や行事に参加する時にはいつも声をかけて下さり一緒に参加したこと、ひ孫さんの写真を見せてくれたり、デイサービスでも一緒に過ごすことが多かったと思い出の話を聞くことができました。私はＮさんと関わる期間は短かったですが、自分の力で動きたい意欲や気持ち、亡くなってから知るエピソードもありました。今後も信頼関係を築いて入居者の方の気持ちをもっと引き出せるような関りをしていきたいです。

Ｎさんのケアハウスでの生活

ケアハウス生活相談員　伊藤　洋子
（介護支援専門員）

Ｎさんは平成２４年にケアハウスに入居されました。

神戸市で一人暮らしをされていましたが、将来のことを考えられ、娘さんが暮らされている近くで入居出来るところはないかと探され、せいりょう園のケアハウスに入居されました。市内の他のケアハウス等も検討されたそうですが、身体の状態が悪くなると退居しないといけないところが多く、せいりょう園ではケアハウスでも看取りを行っている、最期まで暮らせると入居を決められたそうです。

入居当初は、環境の変化や人間関係が上手くいかず退居を考えることもあったそうですが、入居後の日課となった朝の散歩で近隣に１０人くらいの友人が出来、一緒に外出したり話を聞いてもらったりする中で思いとどまることが出来たと話されていました。そのうちケアハウス内にも友人が出来、自然とＮさんの居室に人が集まり何時間もお茶会をしたりすることもあったそうです。

約２年前よりコロナウイルス感染拡大のため、自由に外出したり近隣の友人を居室に招くことが出来なくなり、現在友人とは電話で話をするだけになってしまったとのことですが、電話では１時間くらい話をすることも多いそうです。

しかし、いくら電話で話をしているとはいえ物足りなく、直接会ってゆっくりと食事をしたりお茶を飲んだりしながら話をしたいと言われています。

Ｎさんは、昨年１１月に下肢の痛みから入院・手術を行い、リハビリを経て今年２月に退院されました。入院中は、ケアハウス同様、家族や友人は面会が出来ず、知った人もいない中、寝たきりの期間もあり心細い思いをされたそうです。同じように入院されている人と仲良くなり、看護師も優しく声をかけてくれたり接してくれたことで、入院生活も寂しくなくなり、逆に退院時に離れる寂しさを感じられたとのことです。

退院後は、以前のように身体を動かしたりすることが少し難しくなり、散歩もされていません。介護保険を申請し介護サービスの利用を始められましたが、自身で出来ることはしたいと料理等自身のペースで行い生活されています。今までの友人に加え入院中に出来た友人ともよく電話で話をされているようです。

今後のことについては、「最後までここ（せいりょう園ケアハウス）で暮らしたい」「はやくみんな（友人）を部屋に呼んだり、ごはんを食べに行ったりしたい」と話されています。

～🌸桜に誘われて～

グループホーム管理者補佐　坂村　美由紀
（介護支援専門員・介護福祉士）

　コロナ禍により、外出がままならない時ですが、園内の桜を見て感激の皆さまです❣お昼ご飯は、寿司ご膳にお腹も心も満腹(笑)
　久しぶりのお日様に、笑顔満開でした(›_‹)

～お花見～

ユニット型特養主任　介護支援専門員　別府　克彦
（社会福祉士・介護福祉士）

　ユニット型特養では、４月４日にお花見を行いました。「桜を眺めながら、甘酒、焼き芋を片手に音楽を楽しんでもらおう」と考え、計画を立てました。桜は丁度満開になりました。焼き芋は、コロナ禍以前は毎年秋にせいりょう園で行っていたので、その設備を使用して職員が焼き芋を作りました。音楽

グループホームまどかの造形教室

グループホームまどか主任　曽我部　成生
（介護福祉士）

コロナ禍でご利用者の生活も１階２階とそれぞれ別々になり、職員に「最近、あの人元気にしとるか？コロナやし暫くは顔を見れないけど、もしも病気がうつったら怖いから仕方ないな。」とおっしゃる方や、「いつになったら、この病気が落ち着くんやろかなあ。早く自由に出かけたいなあ。」などとおっしゃる方もおられますが、部屋でテレビを話し相手におしゃべりしたり、ホールで皆さんとテレビを見たりと、テレビ中心の生活です。

一つの生活の変化としてまどかでは、中本 万理恵先生指導の造形教室を週に一度行っています。材料は強力粉をこねて食紅で色をつけたパン生地のようなものです。手になじんで作りやすいです。思わず口に入れてしまう方もおられます。口にしても安心な材料ですが、喉に詰めると危ないので出していただきます。３月は『お雛様』を話を交えながら、一つ一つ悩み試行錯誤しながら仕上げておられました。どの作品も個性的でした。

参加者は１階、２階別々に各週になります。毎回４名ずつぐらい、約１時間かけて仕上げておられます。途中で立ち歩く方やお手本を見ながら丸いお団子になったり、延ばすだけの方もおられます。中本先生はお手本は作ってくださいますがその通りにする指導ではなく、作り手に任せて見守っておられます。

週に一度、外部から来ていただいている中本先生との時間をとても楽しみにしているご利用者の一人は、職員に会う度に「後、何日ですなあ？粘土楽しみ！」とおっしゃいます。

は、タイミングよく音楽教室のミュージックカラーの方から「外での演奏もできますよ」と声をかけて頂いたので、感染症対策を行ったうえで演奏して頂くことになりました。

当日は天候も良く、ご利用者は「芋うまかったで」「最高！！」「本当にこの甘酒おいしいわ」と言われていました。特にミュージックカラーの子供さんたちによる演奏が好評で「フルートであそこまで吹けたら大したもんや」「もう一曲！！」「上手やね」と大変喜ばれていました。最後は、一人ひとり桜の下で写真を撮りました。あるご利用者からは「今日は忙しい日や」と話があったようですが、とてもいい笑顔をされていたそうです。

ボランティアによるイベントは約二年ぶりになります。これからも制限のある生活が続きますが、感染症対策を行い、ちょっとした非日常を企画できればと思っています。

施 設 長 退 任 の ご 挨 拶

１９８５年１０月１日に『特別養護老人ホームせいりょう園』が開園し、同時に施設長に就任。３７才と１０か月でした。

以来３６年７か月の間勤めさせて頂き、２０２２年４月３０日を以って『退任』させて頂きます。

『人生を締め括る貴重な営み』を委ねて下さった『ご利用者の皆様方』には、本当に沢山の事柄を教えて頂きました。心より感謝申し上げます。

『未熟な業務運営』・『至らぬ対処』によってご迷惑・ご心労をお掛けした皆様や近隣の方々には、遅ればせながら、心よりお詫び申し上げます。

其処で経験した事柄を整理しながら書き綴った『機関紙せいりょう園：巻頭の言葉』も、本号で終わらせて頂きます。有り難う御座いました。

ご利用者の皆様方。ご家族の皆様方。近隣地域の皆様方。関係機関の皆様方。施設運営の中で関わって頂いた沢山の皆様方。そして、役員・職員として支えて下さった大勢の皆様方。深く、深く、心より感謝致します。

５月以降は近所に住む一人の老人として、『日の出医療・福祉グループ：はりま福祉会・せいりょう園』、並びに『関係する方々やご利用の皆様方』の応援団となり、当地における『福祉事業活動』と『地域支援活動』の更なる充実と発展を願いながら『エール』を贈ります。

直ぐ近所に住んでいますので、施設の周辺は生活エリアであり、散歩コースです。お出会いした際には、お声かけ頂ければ大変に嬉しく思います。

『感謝』と『謝罪』と『御礼』の意を込め、謹んで退任のご挨拶をさせて頂きます。

２０２２年４月

渋　谷　　哲

【 せいりょう園空き情報　４月２０日現在 】

- サービス付き高齢者向け住宅
  ① リバティかこがわ：９室　② 自愛の家さくら：７室
- グループホーム２F：２室　・グループホームまどか２F：１室
- グループハウス岸本邸：３室

［問合先］せいりょう園 TEL(079)421-7156／(079)424-3433